



TITLE:

ルッターの翻譯論

AUTHOR(S):

鹽谷, 饒

CITATION:

鹽谷, 饒. ルッターの翻譯論. 独逸文學研究 1955, 4: 54-71

ISSUE DATE:

1955-12-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/186248>

RIGHT:

ルッターの翻譯論

— Sendbrief vom Dolmetschen について —

塩 谷 饒

文筆の活動において質量共に肩を並べ得るものが少いと思われるルッターは、その驅使した言語について近代の言語研究者のように體系的な考察を行うことはなかったが、彼らの關心を十分に惹き得る省察を幾つか書き残している。

たとえば、「新ドイツ語詩篇序言」Vorrede zum neuen Deutschen Psalter (1528) の中で、人間の人間たる所以は「語ること」reden にありと次の如く述べている。「まことに默せる人は物言う人に向えば半ば死せる人の如くみなされる。およそ語ることより力強い、貴い業は人間にはない。それは人は形や他の業によるよりも語ることによつてもつとも獸と區別されるからだ。何故なら木も彫師の巧みによつて人の形をとり得るし、獸も人と同じく見、聞き、かぎ、歌い、歩き、立ち、食い、飲み、飢え、渴き得るし、空腹、寒さ、堅い床等に堪え得るからである。」

これはもとより素朴な觀察に基ずく言であるけれども、後に「人間は理性によつて内的に他から區別されるが、言語によつて外的の區別を得る」と論じたヘルダーや、「人間は言語によつてはじめて人間である。」と述べたフンボルトの思想に先驅ける言説であつて、ドイツ思想家の言語觀を歴史的に考察するなら必ずはじめに取り上げらるべきも

のであらう。彼が右の文において、*reden* : と言う言語の行動面に觸れた點が注目に値する。

また言語そのものを色々なものに譬えた記述が「ドイツ全市の市會議員に寄す」*An die Rathern aller Städte deutsches Landes (1524)* 中にある。ルッターは相當の語數を費して言語修得の効用と必要を説いた後に言う、「成程福音はひとえに聖靈を通して來たものであり、また日毎に來るものであるが、それはやはり言語と言う手段を通して來たのである。……言語がなければ福音は保たれない……言語はこの靈の劍の藏められる鞘であり、この寶石を容れる箱であり、この飲物食物を入れる器である。」

そこで彼は言語をおろそかにすれば福音は失われてしまふだらうと述べ、庶民の子が學校に入つて母語やラテン語をよく修めるようにと勸めている。

福音の啓示が常人に解し難い神祕的な象徵によらず、言語を通してのみ行われることを力説した點で顧みらるべき文であるが、これを一般化して思想と言語の問題に至らしめることも不可能ではあるまい。

さらにルッターは右の文で牧師や聖書の註解者に向つては、聖書の原語たるヘブル語やギリシャ語を理解し、原意を正しく把むことが大切だと論じている。

言うまでもなく彼がラテン語からの重譯でなく、直接に原語から聖書を翻譯したことが、その翻譯史上劃期的な意義を持つ所以である。この點において彼は右の文中で勧めた以上のことを實行したわけだが、しかもその譯が廣くドイツ人に讀まれるように如何なる配慮をしたか、これを示すために多くのドイツ語史が左の卓上談話 (*Tischreden*) 中の一篇を引用している。

「私はドイツ語中の或るかけ離れた特別な言語ではなく、共通のドイツ語を用いる。それは高地の人々も低地の人も共に等しく自分を解しうるためである。私はザクセンの官廳語を用いる。ドイツの凡ての王侯はこれに従つてゐる。凡ての帝國直轄市を始め王侯の宮廷においてはザクセン官廳に従つて記す。だからこれは凡てに共通した言語な

のだ。このようにして皇帝マクシミリアン、選舉侯フリードリヒ及びザクセン公^{註(1)}は、神聖ローマ帝國においてドイツ語を一つに纏めてしまった。」

この言は今日の學問の術語を借りるなら、當時のドイツ語の言語地理的認識と、歴史的発展の趨勢に對する見通しが確實であつたことを告げている。皇帝及びザクセン官廳語の一致がここであつさり記された程のものではなかつたにせよ、はじめて共通語に自覺的に指向した人の發言として歴史的な價值が大きい。

これらの言と共にルッターの言語に對する考えを——具體的に母語についての深い理解を——示すものが、「翻譯についての書簡」*Sendbrief vom Dolmetschen* (1530)である。上述の言が或る標題のもとにおいて繰りひろげられた議論の一部をなしているか、又は斷片的に述べられたものであるのに對し、この文は題が告げるように翻譯という具體的な、そして特種な言語行動を主題として公刊された點が特異である。それが文學史において取上げられるほとんど唯一の翻譯論であるのは、此の分野における最初の纏つた發言として意を盡している理由によるだけではない。そこに展開された議論は一般論ではない。彼が如何なる態度で翻譯にのぞみ、如何に苦勞し、如何なる原則に従い、如何に翻譯したかを告げる消息である。自ら全力をあげてその衝に當つたものが實例によつて示す所の説得力、眞理の敵と斷じた者に對する旺盛な戰鬥精神を反映する活潑な文體、單純な論旨に織込まれた巧みな比喻と機智、彼の中心思想の湧出、そしてまた全文の結構のほどよさ——これらが相俟つて本文の文學的價值を十分認めさせる故である。また彼の擧げる例文や特異な用語からドイツ語法や母語とラテン語との關係などがルッターの言語についての考えと共に察知されるので、言語研究者の眼にも重要な文獻として映ずるものである。

二

この手紙は一五三〇年にユーブルクで記された。書上げられるとニュルンベルクの友人リンク W. Linck に送付

され、リンクが短い序を附して公刊したものである。

ルッターは同年四月廿三日から十月五日までコーブルクの城に滞在していた。この期間は前のヴァルトブルク滞在にも比すべきもので、舊約聖書の翻譯と手紙書きに時を送り、此處で記した手紙で今日残っているものが實に一二五通に及んでいる。

しかもコーブルク滞在は自ら好んで著述三昧を目的として行つたものではない。彼の身は城の外へ一歩も出るところを許されぬ軟禁状態にありながら、新教の危機を招來したアウクスブルク議會に陰の人として活躍した時期である。

アウクスブルク議會とは、侵入のトルコ軍を撃退し、フランス王をパヴィア Pavia の戦いで降し、ローマ法王をして同盟を結ぶことを餘議なくさせたドイツ皇帝カール Karl V 1500-1558 がその餘勢をかつて國內の宗教上の争いを止めさせようとして一五三〇年三月諸侯を招集した議會であつた。招集狀は「凡ての人の意見を聞き、兩教會の主張を比較し、唯一の眞の宗教を採用し、全國一教會となつて一致するため」と稱したが、開會六日目の六月廿五日に朗讀された新教側の信仰告白に對し、八月三日その辯駁書が舊諸侯によつて朗讀され、皇帝はこれを以て新教徒は説服されたとしたため兩派は正面からぶつかり結果は逆となつたのである。さらに九月廿二日議會は過半数によつて「新教徒は來年の四月十五日までに舊教に歸れ、以後は強制的に棄教されるであらう。たゞし一年以内に宗教會議を開いて現教會の弊害を除く。」と決議した。新教諸侯及び十四の自由市の代表はその場で直ちに抗議を宣告し、議席を總退場して歸國してしまつたが、議會はなおも續き、ルッターを處刑してヴォルムス勅令を實施すべきこと等を議決して一月十九日閉會した。

Sendbrief vom Dolmetschen が書かれたのはこのような情勢の中においてである。全篇に漲る激しい polemick な調子は以上の事實から了解されるであらう。これが單なる書齋人の翻譯回顧談ではないことは言うまでもない。

その内容も實はアウクスブルク議會において討論された二つのことがらに彼の答を與えたものである。

すなわち、ロマ書三章廿節「我らは思う、人の義とせらるるは律法の行いに由らず、信仰によるなり。」と言う有名な箇所における最後の部分をルッターは *allein durch den Glauben* としたことに対して、原文には *allein* に當る語が見當らないから、これは勝手に改竄したのだと言う非難を駁し、次いで「昇天した聖徒は我らのために執成しを行うか」と言う問に對して否定的な返答を與えたのである。

従つてこれは普通の私信ではない。明かに公刊の目的をもつたものであり、ルッターから送付されたリンクは宛名人ではなく、その刊行者であり、自ら出版の理由を序で述べている。

「……聖書の翻譯について多くの評がなされ、ことに眞理の敵はテキストが多くの箇所で改竄されたかの如く申立てるために單純な信者が驚いたり、おじけついたりする有様だが、この文によつて少くとも背信の徒の演言が封ぜられ、且信者の疑いが除かれるだろうと期待できよう。」

ルッターの本文は “*Dem Erbaren (= ehrbaren) und fürsichtigen N., meinem günstigen Herrn und freunde*” と言う呼びかけで始まる。ベルガー A. Berger はここに名指された N 氏とは實在の人物ではなく手紙の形式を取る上のフィクションであろうと言う。^(註二) そう言へば成程全體は力の溢れた自由な文體で終始して章節の切れ目などないが、その結構には工夫のあとがうかがわれ、前後の簡單な挨拶を除けば試みに次の如く整理できるであらう。

(一) 問題の提示。上述の *Allein* を入れた理由、また聖者執成しについて尋ねた N 氏の手紙を受取つたとまず問題の所在を明かにする。ここは菊版の本で僅か一〇行ですます。^(註三)

(二) 第一の點について。

(イ) 自ら翻譯しない法王の徒に批評の資格ありやを問う。一一〇行に及ぶ激越な文體。翻譯の態度についても一言する。

(v) *Allein* がドイツ語法上要求される所以を説く。

はじめに翻譯の勞苦についての實驗談を述べ、次いで數箇の平易な例文により *Allein* の用法を説明する。またラテン文、ヘブル文との對比を行い翻譯は逐語的に行うべきでなく、よいドイツ語に移すべき原則を明かにする。

たゞし自由譯が原意の傳達を不明確ならしめる恐れがあれば一語一語原文に従つた旨を添える。六八行にわたる説明。

(vi) *Allein* が信仰の論理から當然の歸結だと述べる。如何なる律法の行いによつても義とされず、信仰によつて義とされることをパウロと共に認める以上、この箇所に *Allein* を入れたことは却つて論旨を明確にすると記す。この件りは九六行。

(iii) 第二の點について。

聖徒の執成については聖書に根據となる記事のないこと、むしろキリストと神に直接結びつくべき旨を訴える。執成説を宣傳する舊教會の批判。この項に費された行は一一一行。

全文は短からず長すぎず菊版にして十七頁足らずと言う所であるが、右に記した行數でも分る通り、(ii)の記事は全體の四分の三に及びそのうちのイ、ロが翻譯についての記事でこの項の四分の三となり全體の半分以上を占めるからルッターが *Sendbrief vom Dolmetschen* として發表したことは無理ではない。

ところで(□)の(ロ)から(イ)への轉換は巧みに行われ、(ロ)は(イ)において論理的に展開されることを先ず外側の言語の上から確實にしたのであつて實は(イ)に至る周到な伏線と解される。

(ii)及び(iii)においてはもはや翻譯の事から遠のいてゐるが、そこに述べられた福音主義、宗教の内面性はルッターの中心思想をよく短文の中に展開したと言ふべきである。

(ii)の部分においては無論のこと(iii)においても聖書を典據とする彼の態度があらわに語られ、これを聖書翻譯者の信仰的實踐と見れば全文は前後において有機的な關連を持つていえると言えよう。のみならず後半の部分も緊張を失わない發渾な文體の故に文學的鑑賞に堪え得るものである。

三

私は以下において直接に翻譯に關係ある(ii)(iii)における議論をなるべく彼の言に即して點檢し、言語研究上顧みるべき所があればそれに觸れて見よう。

ルッターは先ず評者に資格ありやを問う。「法皇の徒輩が聖書の一章もうまく譯せる程氣がきいていると知つてたら辭を低うして助力を求めただらう」がそんなことはできないと分つていたから「手數を省いたまで」だ。

ところで彼は「最善を盡し、良心に照らして新約聖書を譯した」のだが、「それを讀めとは何人にも強制しなかつた。」それ所か「自分でそれよりよい譯が出せない人」にだけ役立たる積りである。勿論彼自身はその中に間違ひを「氣付く所でなく、勿論一語といえども勝手に不當な翻譯をしようと思わなかつた」程の自信を十分持つてゐるのだが、「よりよいものを作ることは何人にも禁じられていないのだし、讀みたくなひものは、おいておけばよい。それをお願いしたり、へつらつたりする氣はない」と公明な態度で臨んでゐる。

だが何故法王の徒を彼の書の「批判者とすることは何とも我慢できない」かと言へば、「優れた翻譯者にはどんな工夫と熱と分別が要るか」彼らはロバ程も知らないからであつた。なぜなら彼らは「自分で——翻譯を——やつて見なかつた」のだから。彼らはマタイ傳一章のイエス・キリストの「系圖」と言う語さえ翻譯できないだらう。

このように斷じてから、およそまともな仕事をする、何もしない者、できない者が世話を焼きたがると、ヒエロニムスのラテン語聖書翻譯の故事を例にひき、公けに善事をなす時はうるさい世間を相手に忍耐が要ると述懐する。

彼は一步を進めて、法皇の徒が聖書の一章でも翻譯しようと言うなら讃辭を惜まないし、ルッターのドイツ譯など不要と言われる程のものを見せてもらいたいと迫る。それにもわけがあつた。實はルッターの譯を批評した者が、彼の言葉を剽竊して自己の翻譯として出版したと言う妙なことがあつたのである。これはドレーズデンのへぼ譯者^(註四)がやつたのだが、ルッターの皮肉は痛烈をきわめる。

「彼は私のドイツ語は甘美でよいと言い、自分でそれに優るものがないことを承知しているくせに、しかも私の仕事にけちをつけようとして仕事にかかり、おまけに殆ど一語一語私が譯した通り私の聖書から失敬し、私の序文と註と名前をけづつて自分の序と註と名前を書き、かくして私の聖書を彼の名で賣つたのだ。何たることぞ、君！彼の殿様が恐しい書出しでルッターの聖書を読むことを呪つて禁止し、しかも同時にあのルッターが作つたものと同じのへぼ譯者の新約聖書を読むべしと命じた時、何と妙な氣がしたことだろう。此の點私が嘘ついていると誰も考えぬよう、ルッター譯とへぼ譯者の手によるものと兩方を手に取つて、互いにつき合わせて見給え、そうすれば、兩者のうち何れが翻譯者だかお分りだろう。」

これはルッターの言語が彼に敵對する人々の間にも事實上高く評價されていたことをよく物語るものである。他にもルッターの名が冠せられない限りは立派なドイツ語と認める君主がいたことが傳えられて居り、右の言の誇張でないことが分る。すなわちザクセン公ゲオルク Georg はカトリックの教徒として甚しくルッターを嫌惡していたが、或時畫家のクラナハ Lucas Cranach に對して「お前は常にルッターをほめて彼奴だけが立派なドイツ語を話し、立派な本を作れると言うが、この點も他のこと以上に違つてゐるぞ。まあこの本を見ろ、あのルッターなどは決して出来ないほどよいものだ」と述べたので、クラナハはその本の著者こそルッターで私は彼のサイン入のものを持つていまずよと一冊とりだして見せた所、公は「Ist's doch schade, dass der heillose Mönch solch ein gutes Büchlein hat machen sollen」を不快に叫んだと言われる。^(註五)

さて右の剽窃事件について彼は徒らに怒らず、「非難した他人の勞作によつて己れの名とほまれを求めることがどんな徳であろうとも、それは審き主に委ねることにする」と述べ、「我が勞作が敵によつて獎められ、ルッターの本がルッターの名でなく敵の名で讀まれざるを得ないことをむしろ喜ぶ」のである。

そこには「さらばいかん、外貌にもあれ、眞にもあれ、いずれも宜ぶる所はキリストなれば我これを喜ぶ」(ピリピ書一の十八)と言つたパウロの氣慨に通うものがある。

そこでN氏に告げて曰く「法王の徒輩が *sola=allein* をうるさく言うなら、すぐさま言つてやれ、マルティヌス・ルッター博士が欲するからそうするまでだ」と。

法王の徒輩とロバとは同一物、そんな手合に一々理由を告げてやる必要はないと高飛車に出、彼らに批評者としての資格ありやとの追打ちをかける。この當りからポレミックな文體は一層調子づいて來ることが認められる。

「彼らが博士か。我も然り (Ich auch)。彼らが學者か。我も然り。哲學者か。我も然り。神學者か。我も然り。・・」當時の智者に屬するあらゆる身分を呼び出し、簡潔な Ich auch で應ずること九度に及ぶ。これまた彼自ら斷るようにコリント後書十一章のパウロの語調に通うものがある。「彼らヘブル人なるか、我も然り (原語 *καὶ ἐγώ* 獨譯 Ich auch) 彼らイスラエエル人なるか、我も然り、彼らアブラハムの裔なるか、我も然り。」(二三節以下)

パウロの Ich auch は三回であるけれども、ルッターはその三倍も重ねて居り、さらに我が優者であることを徹底的に告げる態度に出る。「我は翻譯できる。彼らはできない。(Das können sie nicht) 我は聖書を説き明かせる。彼らはできない。我は聖書が讀める。彼らはできない。我は祈り得る。彼らはできない。」

もともと彼らの業で育つた自分だ、彼らの哲學、辯論、實は彼ら以上によくできるのだ、それなのにまるで今朝當地に來た新參者のように扱ふと言を繼ぎ、「馬蹄のかねが鉄だとは七年前に知つたこと (Ich hab's fur sieben jaren gewist, das hufnagel eyssen sind) とあの小娘(註六)と一緒に、彼らのうるさう叫び聲に歌ひ返してやらねばならぬ」

と洒落れた文句を附け加える。彼は第一の間には以上の言を答えにしようとする。

なおロバの徒がうるさく *sola* について求めるなら「全カトリック教會の上にいるルッターがそうしたいからするまでだ」と問答無用の宣言を行い、たゞし君や味方の人々にはなぜ自分が *sola* を用いたかつたか教えてあげようと巧みに本題に轉じて行く。

ここでルッターは周到に、カトリック側が言語理解が不十分なため、問題の提出にすれがあることを一應指摘している。「本當のことを言えば、私がロマ書三章で用いたのは *sola* ではなく *solum* 或いは *tantum* であつた。だからロバ公共は我がテキストをよく讀んだと言うものだ。だが私はどこかで *sola fide* (單なる信仰により) と言う語を用いた。實は *solum* と *sola* の兩方とも使いたいのだ。」

ここに *solum* と *sola* が出てきて煩わしうが、*sola* は「單なる」と言う意味の形容詞だからドイツ語の *allein* とは意味が一致しない。

allein に當る語は *solum* 又は *tantum* である筈。

だから彼らがルッターの *allein* を目して *sola* を入れたと騒ぐのは一寸見當違ひだと虚をついたのである。

彼は語法について説明する前に翻譯に臨んでの原則と翻譯の努力を述べる。この所は大ていの文學史にその一部が引用されるを常とする。

「私は翻譯に際し、純粹明白にドイツ語の表現をしようと努めた。(Ich hab mich des geflissen ym dolmetzchen, das ich rein und klar deutsch geben möchte.)」

翻譯はこねたドイツ語で表現すべきこと、これが彼の公理である。しかし實際にそうするまでは甚しい苦闘があつたことを物語る。「我々は二週また三週、四週かかつて一語を探し求め、しかも見出せなかつたことすらたびたびある。ヨブ記ではメラシヒトン、アウロガルスと私が、時には四日かかつて三行と譯し終えなかつた程だ。さて

君、譯ができて見るとどうだ。誰でも讀んでそれを批評することができる。今人々が三頁、四頁と眼を走らせて一度も躓かないと言つても、カンナをかけた板上を行くようにすら進める所にはかつてどんなにか石ころや木株があつたか氣付かない。我々がそれらを取除いて、皆が具合よく通つて行けるようにするために、どんなに汗水たらして苦しんだか知れないのだ。畠がきれいになつていれば耕すのは樂なこと。だが森に手を入れ、木株を除いて畠を整えること、これはやり手がない。」

かつてヴァルトブルクで三ヶ月と言う短期間で新約聖書を譯し去つたルッターではあつたが、刊行の運びとなるまでの間にどれ程推敲したか、また舊約の翻譯でどれ程手数をかけたかはメランヒトン等の筆によつてもうかがえるが、右の言に接してわが杉田玄白の蘭學事始め中の眞剣な記事を連想する人もあるであらう。勿論一つは母語への表現の努力であり、他は原文の理解の苦闘だと言う差はあるが。

ルッターが翻譯者の勞を開墾に比し、讀者の勞を整理された土地の農耕にたとえたことは平易ながら獨創的な比喩で彼はこのように對比したとえをよく好んで行つてゐる。

ところでこのような勞が報いられぬことも「天地を創り、あまつさえ獨子を死なせ給うたにもかかわらず何ら世より感謝を受け給わぬ神」のことを思えば何ともないと言う。

このようなわけで彼はロバ達が *sola* について文句を言うが、實は「*sola* ではなく *solum* がギリシヤ語やラテン語のテキストにないのを知つていた」けれども、しかも明白に力強くドイツ語に譯そうとすれば必要になると主張する。なぜなら彼は「翻譯においてラテン語やギリシヤ語を語ろうとしたのではなく、ドイツ語を語ろうと企てたのだから」と今一度翻譯の原則を明かにかかげ、今度は *allein* が必要なのはドイツ語法の然らしめる所と實例によつて縷々説明するのである。

「二つのことについて一方を肯定し、他方を否定する表現をなす場合、*nicht* や *kein* と並んで *solum* (= *allein*)

や言う語を用ゐるのがドイツ語である。たとえば Der Bauer (= Bauer) bringt allein Korn und kein Geld. nein, ich habe warlich yrtzt (= jetzt) nicht geld, sondern allein Korn. Ich habe allein gessen (= gegessen) und noch nicht getruncken. Hastu (= Hast du) allein geschrieben und nicht uberlesen? の如く。

これらと同じ表現が日常の語法に無数に存在する。これらすべての場合、ラテン語やギリシヤ語ではやらなくてもドイツ語ではやるのだ。nicht や kein と言う語が完全に、よりはつきりするのため、allein を附するのがドイツ語法である。なぜなら、私は Der Bauer bringt korn und kein geld と言わぬことはなうが、allein を用ゐた程には kein geld が完全且明瞭に響かなう。Allein と言う語は kein を甚だうまく助けて、完全なドイツ語、明白な表現とするのである。」

原文にもラテン語聖書にも allein に對應する語がないが、ドイツ語譯にあつてならぬとは言えない。單語は文中にあつて互いに他の語と張合つて職能を果すのだから切離して扱うべきでなく、ドイツ語全體として見るべきだと言うわけで、allein を入れたことが不當でなく、かえつてドイツ語らしい表現にするとの釋明である。これは簡單だがルッターが母語の性質を十分理解していたことを示す言說であることは言うまでもない。

さらに、當時文法と言えばラテン語のものばかりで、ドイツ語法についての組織的な論述や文例の集成がなかつたのだから、ここに allein と否定詞の關係を論じて、説明のために數箇の文例をあげたのは當時の語法を知る大切な手掛りとなる文獻だと言えよう。そして、音韻及び文法の構造においてはザクセン官廳語を範とした彼が表現法においては日常の表現を参考としたことをよくうかがわせるものである。これを補つて “Den (= denn) man mus nicht die buchstaben inn der lateinischen sprachen fragen, wie man sol Deutsch reden, wie diese esel thun, sondern man mus die mutter ihm (= im) hause, die kinder auff der gassen, den gemeinen man auff dem marckt drumb fragen und den selbigen auff das maul sehen, wie sie reden, und darnach dolmetschen, so

verstehen sie es den und merken, das man Deutsch mit in reden.”と續めた所はどの文學史、語史にも——綴字を改めた上——引かれる名文である。事實彼は必要とあれば金物細工師の仕事場に通り、山羊を屠る場所に居あわせて、獨特な表現を傾聴したと言われている。

右の言や事實は、言葉の生きた姿は固定した文字の上ではなく、實際に語られる言語に見られると、十九世紀になつてから専門の學者がやかましく論じ出したことであるが、ルッターは翻譯に當つて十分心掛けていたことを告げてくれるものである。

次にルッターは原意を把んでよいドイツ語で表現をする必要のあることを一層明白にさせるためにラテン語新約聖書の表現と自分のよしとする翻譯とを對比して行く。

一體彼はギリシヤ語の原文から譯したのだから、それとの比較を行うべきであるのだが、當時のカトリック僧侶の多くにギリシヤ語の知識はなく、教會の言語、學術の言語としては専らラテン語が用いられたので、これと比べて本文が廣く讀まれるように配慮したのである。

先ず *Ex abundantia cordis os loquitur* 邦譯「それ心に満ちるより口に言わたるなり」(マタイ傳十二ノ三四、ルカ傳六ノ四五)

法王の徒はこれを直譯して *Aus dem überfluss des hertzen redet der mund* と言うだろうが、そんなものは果してドイツ語かと嘲る。*überfluss des hertzen* (Überfluss des Herzens) と言えば大きすぎる心臓か *allzu ein gross hertz* 或いは餘りにも多くの心臓を *zu viel hertzes* 持つことになりかねないと述べ、自分は *Wes das hertz voll ist, des gehet der mund über* と譯したが「これこそよいドイツ語と言うべきで、私はそれを求めに求めたのだ」と説明する。しかし彼は必ずしも常に満足していたわけではなく、その努力も「残念なことに未だすべての點で達成したわけではない。何となればラテン語の文字が立派なドイツ語にするのを甚しく妨げたから。」——常に残る翻譯者の

不満をここにも正直に吐露している。

次はイスカリオテのユダが、香油の壺をそそぎ出してイエスを拭いたマリヤを咎めた言 *Ut quid perditio hoc* 「何故かくみだりなる費をなす」(マタイ傳二六の八) *Ut quid perditio ista ungenti facta est?* 「何故かくみだりに油を費すか。」(マルコ傳十四の四)

ロバ達に従えば *Warumb ist dise verliering der salben geschehen* とならうが、それではお話にならない、本當の「ドイツ人なら *Was sol doch solcher unrath?* 或は *Was sol doch solcher schade?* それどころか *Es ist schade umb die salbe* と言おう。これこそ立派なドイツ語」である。

第三はルカ傳第一章二八節において天使が處女マリヤに挨拶して「めでたし、恵まるる者よ、主なんぢと偕に在せり」と言う所である。ルッターはもはやラテン語文を引用せず、カトリック側が直譯するであろう所の一文を示し、

——*Gegrüet seistu Maria vol gnaden, der Herr mit dir.*——それを批判しつつ己れの譯と對比する。「*du bist vol gnaden* とは一體このドイツ人の言うことか。」彼は *vol gnaden* と言えばビール一杯入った樽 *ein vas vol bier* や金の詰った財布 *beutel vol goldes* を聯想せしむるを得ないとエーモラスな發言をする。結局彼は思い切つた譯語で *Du holdselige* とした。こう言う譯では敵はマリヤを冒瀆すると言つていきまくだらうと察するが、彼はそれでも十分でなく *Got grusse dich, du liebe Maria* と言いたかつた旨を添える。「およそドイツ語のできるものは *du liebe Maria, der lieb Gott, der lieb Kaiser, der lieb fürst, der lieb man, das lieb kind* などの表現がどんなに情のこもつた美しいものであるかを心得ている。」そして彼はこの *lieb* と言う語がラテン語や他の言語では到底言ひ表わせぬ程の情の籠つたもので、ドイツ人の心琴に觸れる表現をすると言ふ。

さらに舊約聖書の場合を一つあげ、天使がダニエルに呼びかけた時、ドイツ語で言つたならやはり *Du lieber Daniel* としただらうと述べる。ヘブル語の *Daniel hamudoth* 又は *Isch hamudoth* は直譯すれば *Daniel du man*

der begirungen 或は Daniel, du man der lüste となるかも知れないが、それは大したドイツ語だ、man, luste, begirunge (本當は lust や begyr の方がもつとよいと附け加える) はそれぞれドイツ語中にあるものだが、それをいふ du man der begirungen などと言えばドイツ人は了解に苦しんでダニエルは悪い欲望をもつていふと思ふだろうと言ふ。單語の羅列で足れりと言ふべきでないと言ふのがその箇所の要點である。彼はおよそドイツ人なるものは Du lieber Daniel, du liebe Maria, du holdselige mad (= Magd), du niedlich jungfraw, du zartes weib と言ふのだとこねたドイツ語をたゞみかけ、翻譯しようとするものは語彙を豊富に貯えておき、單調な表現を行ふぬようにと注意する。

ここでルッターは翻譯に當つて自分が用いた表現を釋明したら「それだけでも一年も書續けなければなるまい。翻譯がどんなに勞の多い仕事であることは十分解つてゐる、何も試みなかったものに批評されたくない。」と初めの言にもどつて行く。

そこには敵に對する痛罵が見られるが、またこの翻譯で一文ももうけず(一)、たゞ神の榮光のためにやつたのだと言ふ動機の純粹を力強く訴える言が重ねられ、「一人のキリスト者だに忠實な勞働者を認めてくれるなら我が勞は報いられて餘りがある。敵のおこがましい稱讃こそ心が痛む、彼らの演言は最大の榮譽である」とさへ極言する。

翻譯論の終りに近ずいた所で彼は第二の公理を掲げるが、その例はもはや簡單なものとなつてゐる。ルッターは「よいドイツ語」で表現すると言つても意譯でおし通したのではないと注意する。「私は餘りに文字に忠實でないよなことはしなかつた。必要とあれば文字に従つてやり、勝手に離れないように細心の注意をした。ヨハネ傳六章でキリストが Diesen hat Gott der vatter versiegelt 『父なる神は此の者を印し給えり』と言われているが、Diesen hat Gott der vatter gezeichnet 或は diesen meint Gott der vater の方がもつとよいドイツ語であつたらう。」でも彼は原語から遠ざかるよりはドイツ語を「破らう」、「abbrechen」としたと言ふのである。彼が言ふ所の「文

字」„Buchstabe”は正確には「語」„Worte”，と言うべきであらうが、それは餘り取立てて論ずる必要はあるまい。ゲルマン語學の礎を署いたグリムでも「文字」と「音聲」とを區別せず Buchstabe と記していたのだから。

かくして翻譯論は結びに入る。「あゝ翻譯とは誰にもできる業ではないのだ」と言い、それには正しい信仰と誠實勤勉、博學と經驗と鍊達の心を要すると斷じて、筆は一氣に信仰の論理に轉じて行くのである。

四

以上の所論は平明であつて、これをさらに敷衍することは蛇足であらう。その文學的な價値の認識はこの發洩たる議論を原文によつて味讀しようとする者なら自らできるのだと言いたい。私がなお少しく言を繼ぐのは、ルッターの文の内容に關してではなく、ここに記された言語そのものがドイツ語史の研究に興味ある事實を示していることを指摘したいからである。第一にそれは語義の變遷と言うことを痛切に考えさせる。第二にはドイツ語とラテン語の交渉の深さを告げて止まなう。

ここに記された言語は一五三〇年のものであるからルッター獨語の中期に當る。そこには「基督者の自由」„Freiheit eines Christenmenschen” 1520 や新約聖書初版 „Septenberbibel” 1522 等に見られる特異な中部方言の要素は殆ど拂拭されている。しかし何しろ四三〇年も前のドイツ語であるから綴字、形態、文章論、語彙の各分野において現代語と相當差があることは言うまでもない。^(註七)

しかし今日普通に用いられている語彙も現在とは異なる意味を持つものであるものが相當數に上るのである。標題にかかけられた *dolmetschen* からして、それが *mündlich übersetzen* の意味に限られていたかつたことは、語源辭典の厄介にならずとも本文の最初の一頁に目を通してただで分る所である。問題の「マ書」の箇所において *wir hatten das...* が「我らは思う・・・」の意味に使われているが、今日では *wir hatten dafür, dass...* としな

はならない。さらにルッターが力を籠めて説いた *allein* の用法も現代のドイツ文語では必ずしも同一ではない。なるほどのこの語は前に述べたことと對立する叙述を導びき、その意味は *aber* より強いけれども、彼の言うように否定の事柄と關連して用いられるわけではなく、接續詞としては文頭に置かれるのが普通である。従つて彼が擧げた *Ich habe allein gessen (= gegessen) und noch nicht getrunken. Hastu (= Hast du) allein geschrieben und nicht überlesen?* と言う例も現代のドイツ散文では自然とは言えなくなつてゐる。ルッター鑲骨の名譯と言われる „*Wes das Herz voll ist, das gehet der Mund über.*” (綴字を現代化したもの) はバーゼッケ G. Baesecke によれば當時の口語にもとずく表現であるが、これは今日ルッター鑲造の格言として耳衆を打つものであり、現在普通の文としては *wes, des* は勿論のこと、*übergehen* も *überlaufen* に代られ、*„Wovon das Herz voll ist, davon läuft der Mund über.”* となる苦だと言ふことである。なお私の氣付いた所を記せば次の諸語が→の次に書かれた意味を示してゐる。Bericht→Unterricht, bekenen→bejahren, Unrat→Verschwendung, verhoffen→erwarten

現在自動詞として使われるのが普通である *brennen, ketzern, urteilen, zeugen* などは他動詞となつてゐる。だから形が同一であつても解説に注意を要することが一再なりである。

ラテン語との交渉が如何に深かつたかは聖書の原文が示されずにラテン文が記されていることでも察せられたが、ルッターの用語においても認められる。彼の聖書をはじめ各種の散文においてなるべくドイツ語本來の語彙を使った點が十分認められるが、それでも今日のドイツ語に比べればラテン語彙の使用される率が多い。本文には——序を含めて——*Scrupel = Zweifel; materi = Stoff; questionen = Fragen; glosz = Glossar, Ausdeutung; proenium = Vorrede, capitel = Hauptstück, exempel = Beispiel* などがあり、最後の二つ——就中綴字を修飾した *Kapitel*——の他は今日文語に普通現われるものではない。また今日使われる語ではあるがラテン語の變化に従つてゐたものをそ

のまじりけな Philosophia, Dialectica, Biblia, Apocalypsi, Evangelii (——o), Theolog.; Philosophi, Doctores などがあげられる。現代でも使用されルッターにおいてますますドイツ語的な變化を行つてゐるのは Prophet, Psalm, Sophist, Testament がある。

注目すべきは一つの事柄をドイツ語とラテン語の兩方を以て表現することで *fragestück oder materi; questionen oder fragen* の如き例がある。これはルッターがよく行い本書にも見られる同義語の重ね——*vol und rund, kraft und macht, wirken und schaffen, putzen und schmücken*——とは性質を異にしてゐる。それは修辭上のあやではない。知識層はつかめしラテン語彙を使用するのが常であり、大衆は親しい母語の表現に生きているのだが、その併用は双方に意志の傳達を圖らうとする筆者の意圖である。

註

- (一) ザクセンは當時フリードリヒ、ゲオルクの兄弟が分有してゐた。前者は選舉侯でルッターの保護者であり、後者は彼を憎む者であつた。宮廳語については前者に主導権があつたが、相隣るものであつたから兩者は共通の言語となつてゐた。
- (二) A. Berger: *Grundzüge evangelischer Lebensform und nach ausgewählten Schriften Luthers*, Leipzig 1930 Verlag von Philipp Reclam, S. 330.
- (三) 右の本のことである。
- (四) ルッターがへば譯者 (Sudler) ときめつけた人はエムザー H. Emser だ、ルッターの聖書の手きびしい批判を行い、自らも翻譯し一五二七年ザクセン公ゲオルクの序を附して刊行した。
- (五) F. Klinge: *Von Luther bis Lessing*, Straburg 1897 Verlag von Karl J. Trübner, S. 40.
- (六) ヘルガーは上掲書でさうぶ (S. 275)「當時の笑劇のことを言ひつゝと推測しつゝ」。
- (七) 本文の語法全般については私の手許でそれを纏めた草稿がある。
- (八) G. Baesecke: *Die Sprache der Lutherbibel und wir*, Halle 1932 Verlag von Max Niemeyer, S. 9.